

2016年8月7日開催

第9回ベーシックセミナー 質問用紙記載の質問

増田先生あて

【質問】

自己凝集があった場合、IgM だというお話でしたが、IgM の場合必ず自己凝集が起こるのでしょうか。(自己凝集 (-) なら IgM は否定できるのか。)

【回答】

IgM で必ず自己凝集が起こるというわけではありません。自己抗体である IgM の濃度と赤血球数で自己凝集が決まると思います。仮に IgM による IMHA 症例でかなり慢性経過を取っている症例がいたとして、最初は IgM の自己凝集が起こって貧血が進みそのうち赤血球数が少なくなった状態のとき、同時に、当初より IgM 自己抗体の量が減った場合には、自己凝集を起こすに十分な量の IgM がなく、赤血球数も減り自己凝集を生じにくい状況になることはあり得ます。臨床検査はすべて、検出できればそうであると言えますが、検出できないからといってそうでないとは言えませんので、あくまでもひとつの指標としてお考えください。

【質問】

直接クームス試験の冷式のみで陽性だった場合、生体内で、その温度になることはないのか、あまり重要視していなかったのですが、その点はどの様に考えれば良いのでしょうか。

【回答】

生体の臓器の温度が 4℃になる状況は非常に限られています。真冬で耳介や尾の先などの外側辺縁部に限られると思いますので、先生のお考えのとおりそのような状況を回避しておけばあまり重要視する必要はないと思います。しかし、それもそのような病態を持っているとわかった症例に指導できるものですので、検査を行ってそういう症例かどうかをまず最初に見分ける意義はあると思います。また、IgM の反応は 4℃にするとよく赤血球と結合するため (通常でも IgM 自己抗体は産生されていますが、低濃度であることと低温にならないので疾患に繋がらない)、実施することで体内に IgM 自己抗体が異常な量で存在することを確かめる価値はあると思います。

【質問】

続発性の免疫介在性疾患の場合でも自己凝集が認められる可能性はあるのか。

【回答】

はい、あります。続発性の場合には腫瘍などあらゆる疾患が含まれますので、何らかの

要因で IgM だけ産生することはあると考えます。

【質問】

自己抗体が IgM の場合の IMHA の場合は、どのように治療すれば良いのでしょうか？
人用のリツキシマブやフルダラビンを犬や猫に投与できるのでしょうか。その場合の投与はどのようにすればいいのでしょうか。それともビンクリスチンなどのリンパ腫の治療にもちいている抗ガン剤の方が有用でしょうか？

【回答】

残念ながら犬や猫においてこのような場合には効果的な治療法はありません。リツキシマブはヒト化抗体ですので、犬には投与できません。フルダラビンは投与できますが、抗がん剤ですのでその使用方法がその他の抗がん剤と同様に問題になると思います。リンパ腫治療に使用する抗がん剤の有効性もおそらく自己免疫性疾患では症例毎に様々であらうと思いますので、確約した効果を提示することは難しいと思います。逆に抗がん剤ですのでその副作用も心配になりますから安易な使用は注意が必要であると思います。もし使用される場合には、症例の状態を考慮した上に、さらにその辺りの状況を飼い主様とよく相談の上、ご使用になられるのが良いと思います。